

日本統治下台湾における歴史意識とアイデンティティの一考察

磯田 一雄

1. 日本の植民地教育は効果があったか
2. 台湾人はどの程度「日本化」したか
3. 抵抗か屈従か
4. 台湾人アイデンティティの基盤：荘堡と荘廟
5. 大衆の「歴史意識」
6. 「日本化」は「奴隸化」でなく「文明化」である
——台湾人のアイデンティティの根源——

キーワード：日本化、皇民化、歴史意識、奴隸化、文明化、アイデンティティ

1. 日本の植民地教育は効果があったか

歴史意識は民族意識を左右するから、植民地支配を効果的に行うためには、被植民者側の歴史意識を適切に操作する必要がある。戦前期日本の植民地であった朝鮮・台湾などにおける歴史教育で使用された教科書は、被植民者の歴史意識を支配者日本側が操作しようとした意図を端的に表したものである。換言すれば、日本の神話や天皇中心の歴史＝皇国史観などを通じて「日本化」（文化や歴史意識における「日本人化」であって、政治上の権利や平等などでのそれを意味しない）を図ろうとしたものである。だが意図は必ずしもその結果とは一致しない。日本の植民地における歴史教育の効果は実際にはどうだったのだろうか。支配者側の意図はどれほ

ど受容されたのだろうか。それは朝鮮においては激しい反発を招いたとされるが、台湾においてはどのように受け止められたのだろうか。

筆者は以前『東アジア研究』第29号で、日本統治期の朝鮮と台湾において使用された、それぞれの総督府が編纂した歴史教科書を比較検討したことがある。どちらの教科書も当時の日本の文部省が編纂した国定歴史教科書『尋常小学国史』を土台とした教科書で、朝鮮においては文語文で書かれた国定教科書そのものに若干の朝鮮史教材を補充して編纂されていたのに対し、台湾においてはその用語を平易な敬体口語に改めて分量も減らして子どもの学習負担を軽減するとともに、台湾の固有史といえるようなものはほとんど含まれていなかった。また朝鮮の歴史教科書は頻繁に改訂されており、最後の段階では循環カリキュラムにより、小学校5・6学年で「神代」から現代まで二度くり返して教えるなど内容の変化の度合いも大きかったのに対し、台湾の歴史教科書は改訂の回数も少なく内容の変化も大きなものではなく、最後には日本内地の国定歴史教科書を採用することになったことなどを指摘した⁽¹⁾。

これは朝鮮においては古代からの王朝の歴史があり、朝鮮民族の愛国心・ナショナリズムや歴史教育の要求に対処する必要があったのに対し、台湾は独立した国家としての前史がなく、

(1)磯田一雄「日本の植民地歴史教科書に関する一考察——「朝鮮」と台湾の「国史」（日本歴史）教科書を中心に——」

『東アジア研究』第29号、大阪経済法科大学アジア研究所、2000年8月。

少数の先住民を除けば大陸からの移民であり、日本が領有したときに清国に帰属することを希望するものは一定期間内に大陸へ復帰することが可能であったためか、台湾においては漢文廃止の反対運動は起きてても歴史教育の要求は起きていないし、また総督府としてもむしろ政治や経済・貿易などの面だけでなく、文化や教育の面でも台湾と大陸中国との切離しが一番大きな課題になっていたためと思われる⁽²⁾。さらに言えば、戦前期の日本の初等教育における歴史(国史)教科書は政治史や軍事史が中心で、文化史や社会史は軽視/無視されていた。日朝関係史においては政治史・軍事史上の大きな出来事が近代以前にあったが、日本領有以前の台湾と日本との間にはそれが乏しかったから、台湾にどれほど豊かな文化や多様な社会が存在しようと、そのような教科書には載るべくもなかったのである。また台湾総督府は子どもの「国語能力」(日本語力)に応じて歴史教科書の内容を修正する必要を朝鮮総督府より強く感じていたように思われる。

このような歴史教科書の性格を見ると、台湾においては歴史教育はむしろ脇役であって、日本によって統治されるにふさわしい歴史意識の形成は、主として国語や修身に委ねられていたかのような印象を受ける⁽³⁾。だが、台湾における歴史教育(教科書)が仮に脇役であったにせよ、その効果が全くなかったとはいえないように思われる。例えば台湾の研究者周婉窈は「こういう歴史教育を受けた台湾人は、台湾の歴史や中国の歴史の認識が非常に薄弱だ」と述

べている⁽⁴⁾。そのように台湾人の歴史意識やアイデンティティをあいまいにしたという意味では日本の歴史教育は相当程度効果があったことになろう。台湾総督府の歴史(国史)教科書はそのように消極的な意味では「台湾人をつくった」といえるであろう。

筆者はこの点を明らかにするために、1997年に台湾南部の新営と六甲で聞き取りとアンケートによる調査を行ったことがある。これはインフォーマントの数も少なく、きわめて不完全なものであったが、その後周婉窈によって、筆者と問題意識を一部共有するようなアンケート調査⁽⁵⁾が行われ、その結果が筆者のものと通ずるところがあったので、筆者の調査結果と合わせて紹介すると共にその理由を考察することにした。

まず筆者の調査によれば、台湾の皇民化世代に一番定着したのは修身だったようである。歴史はほとんど覚えていないが「教育勅語」「修身」はかなり記憶されているように思われる。また理念的な「天皇」のほうが具体的・一回的な「皇国史」よりは定着したように見える。数が少ないので一般化はできないが、台湾史上の人物としては鄭成功よりも、歴史教科書には登場しない呉鳳のような国語・修身教材の人物がよく記憶されている。これは歴史教育よりも修身(生活倫理)教育のほうが効果があったことを示すものであろう。「殺身成仁」という儒教倫理以上に「野蛮」に対する「中華文明」の象徴として受容されたのかもしれない。天皇にしても歴史的な存在としてよりはむしろ「神様の

(2) 矢内原忠雄は「……我が台湾統治は台湾を支那より引き離して日本に結合することに存した。関税法によりて台湾の貿易路を支那より日本に転向せしめたること、清国人本島人(当時の台湾人の呼称)のみの株式会社設立を阻止したりしこと、及び教育上の国語(日本語)政策等いづれも台湾を支那の影響より遠ざくる制度である」といつている(矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』1929年、233頁)。

(3) 磯田一雄「日本統治期台湾の歴史教育と教科書」、

天理台湾学会究第13回研究大会発表、2003年6月。近く『天理台湾学会学報』にその要旨が掲載される予定である。

(4) 周婉窈「歴史的統合與建構——日本帝国國內台湾・朝鮮和滿洲国的『国史』教育」、中央研究院台湾史研究所籌備處、2002年。

(5) 周婉窈「失落的道德之世界——日本殖民統治期台湾公学校修身教育之研究」『台湾史研究、第八卷、第二期』、中央研究院台湾史研究所籌備處、2002年。

ような存在」「尊敬の対象」「ありがたい」というように修身科的に受け止められている。それに対して具体的な人物である日本側の皇族代表北白川宮（能久親王）は、修身・国語・国史などで繰り返し教えられたはずなのにほとんど記憶されていないらしいのと対照的である⁽⁶⁾。

いっぽう最近周婉窈によって行われたより広範なアンケート調査によれば「もっとも印象に残った教科」は修身であり、これは国語に次いで「おもしろかった」とされている。そして卒業後人間関係を維持する上で「もっとも役立つ教科」であった。修身に比較すると国史は印象に残った度合いが三番目であり、修身の三分の二に過ぎない。おもしろさの点でも三番目であるが、「社会的にはほとんど役に立たない教科」だったと評価されているのである⁽⁷⁾。国史は日常性に乏しいばかりでなく、その皇国史観は民衆の倫理感ないし「コスモロジー」にきわめてなじみにくい性質のものであり、影響を与えにくかったということかもしれない。むしろ豊臣秀吉や徳川家康のような人物のほうが「三国志」的興味で受入れられたのではなかろうか。

いずれにせよ、歴史を習った（学ばされた）民衆（子どもたち）は、教えられたことをそのまま覚えたのではなく、自分の中で、あるいは民族としての生活や伝統・習俗の中で、自分なりの意味を持つと思われる限りで内容を選択し「受容」しているように見受けられる⁽⁸⁾。この選択的受容は教育意図に対する民衆の一種の「抵抗」とも考えられるが、それではその選択はどのように行われていたのでしょうか。また

その背景に何があったのであろうか。

2 台湾人はどの程度「日本化」したか

かつて植民地であった国ないし地域が植民地化から解放されたとき、これから新しい国家の主体＝国民となるべき人々（それまでの被植民者）がそれまでの植民地化による影響をどのように被っているかは、その国家建設の前提となるきわめて重要な問題である。光復直後の台湾において、この点をめぐって最初に生じたもっとも切実な問題は、歴史意識をも含めて台湾人がどのくらい「日本化」しているかであった。日本の敗戦によって台湾は中華民国に返還されることになったが、当時の中華民国政府は、台湾人は「日本化」されており、それを「中国化」することが台湾統治の最優先課題だとしていた⁽⁹⁾。また国府はこの「日本化」されていることを理由に、台湾人が戦後台湾の政治的主体となることを拒否していたのである。

それでは「日本化」はどの程度達成されていたのだろうか。「日本化は成功したか」というのはきわめて微妙な問題である。「成功」していたとすれば被植民者の主体性や誇りを軽視する恐れがあり、逆に「失敗」したとすれば与えた影響を軽視し植民地化を行った日本側の責任を回避することにつながりかねないからである。これまで聞き取りなどを行うと、旧「満洲」や朝鮮では「日本化」の失敗が強調されるのが常であった。日本は懸命になって日本化／皇民化しようとしたけれども、民族意識が高かったか

(6)1915年に行われた『公学校用国民読本』の教材の好悪を尋ねる調査によれば、呉鳳を好む生徒は41人中40人で一位、日本武尊を好む生徒は13人で最下位に近かったという。(駒込武『植民地帝国日本の文化統合』1996年、岩波書店、184頁)

(7)周婉窈、前掲「失落的道徳の世界」。

(8)このような子どもの側の教材の選択的受容について、子どもは授業の中で「教科の論理」をそのまま受け入れるのではなく、「生活の論理」と照合しながら受け

入れているのだ、という見解が出されたことがある(東井義雄『村を育てる学力』1957年、『学習のつまずきと学力』1958年)。「生活の論理」とは「子どもの感じ方、思い方、行い方のすじ道」であるが、「教科の論理」を「教化の論理」と言い換えれば、この見解は大人の社会生活の場合にも適用できるのではないか。

(9)黄英哲『台湾文化再構築1945～1947の光と影』創土社、1999年、7頁。

らその企ては達成されなかったというのである⁽¹⁰⁾。

「満洲」に比べ本来の植民地であり、被支配の期間も50年と長かった台湾でも「日本化」の成否・程度の指標となる日本語の普及について「たいしたことはない＝失敗した論」のという見解がある。例えば台湾における日本語教育研究の先達である蔡茂豊は、一部の都市部を除き「日本語教育は成功しなかった」といっている。また日本語の浸透度についても台湾より朝鮮のほうが上だというような疑問も提起されている⁽¹¹⁾。

それに対して黄英哲は日本化政策は「成功した＝（台湾人はかなり）日本化していた」という見解を紹介している。黄昭堂によれば、「このような状況下で台湾人が自らを日本人だと認識したとしても不思議ではない。事実日本支配の末期には、かなりの台湾人が日本化されていた」。文学者葉石濤の「個人的な感触」では「厳密な統計は無いが……終戦の段階ですすでに台湾の人口中三分の二までが日本化されていた」という⁽¹²⁾。また張良沢によれば「戦後初期の台湾は、中国に復帰したものの、基本的にはまだ日本語文化の圏内にあったとし、推定によれば、終戦前夜の台湾における日本語普及率はほぼ七〇％になっている」し、当時の雑誌『新台湾』によれば、「三〇歳以上の知識人で中国文が読めて、書けるものは百人の中一・二人を見出せる程度……三〇歳以下ではもう駄目で

ある。二〇歳以下になると台湾語さえも完全に話せず、日本語の方が流暢」という状態であったという⁽¹³⁾。一方台北帝国大学教授金関丈夫は台湾人学生を指して「彼らは、もう自分たちは、日本文化ときりはなされないのだと自覚する。……自分たちの故郷は日本だとさえ、感じている」といっていたという⁽¹⁴⁾。

確かに国語常用運動は統計上は高い日本語普及率をもたらしたものの、殆どの台湾人にとって「国語」（日本語）は教育をうける手段、公的な場面でのコミュニケーション手段として受け止められ、日常生活は台湾語で行うという「二言語併用」（総督府にいわせれば「二枚舌生活」）が定着していったというのが実態のようである⁽¹⁵⁾。一般には日本語を強制された時代にはむしろいい加減に学んでいたが、光復後中国語を強制した国民党の支配に反抗して初めて本気になって日常的に日本語を使い始めたといわれている。

しかし中には文学関係者を始め、日本語が単なる手段ではなく「価値の一部」となった人たちを生み出したのも事実であろう。したがって「台湾は公的には日本語、実際には台湾語の二言語社会になった」、あるいは、台湾社会が日本化した上層と日本化していない下層に「二極分解」したのだということになる⁽¹⁶⁾。先の『新台湾』の論議は「知識人」を対象としたものである。光復前の台湾で中等以上の教育を受けるとなれば日本人並みの日本語・日本文化を

(10)これは日本が統治した期間の長さの違いもあるが、いわゆる「民族教育」を被植民者側の教師がどの程度行いえたかにも関係するであろう。聞き取り調査の記録に多くの実例があるが、筆者のものとしては「旧満洲国における皇民化教育の聞き取り調査」『成城学園教育研究所年報』第十七集（成城学園教育研究所、1994年）を参照されたい。

(11)拙論「日本の植民地教育は成功したか——台湾における日本語教育を中心に——」『アジア文化研究』第7号、2000年、89-92頁。

(12)黄英哲、前掲書6頁。

(13)同21頁。

(14)同14頁。

(15)藤森智子「台湾総督府による皇民化政策と国語常用運動——一九三七年から四五年までを中心に——」『法学政治学論究』第49号、2001年、78-79頁。

(16)多仁安代「日中戦争期の台湾における日本語教育」『全国語学教育学会山口支部研究紀要』第4号、1998年、8-9頁。このことに関連して1930年代半ば以降の日本語による台湾文学の成立が当然問題になろうが、これは別の機会に改めて論じたい。

身に付けていなければならないし、またそういう学生の家庭は当然かなりの程度まで「日本化」していたと考えられる。蔡茂豊も認めているように、一般に中等以上の教育を受けた世代はこれに近い人が多かったのではないか⁽¹⁷⁾。

だがそれは台湾人全体の人口比で言えばごく一部分に過ぎないともいえよう。公学校教育しか受けなかった（あるいはそれさえ受けなかった）一般台湾人には縁の薄い世界であり、そういう一般大衆は表面に現れにくいので、どうしても日本語を駆使できる階層の状況が一般化されやすい。階層による「日本化」の差がどれくらいあったかが問題になるだろう。「もの言わぬ層」の日本化の実態、さらに言えば、言語のような外から計りやすい面で「日本化」しようとする意識の下層にある、漢族としての伝統的な習俗や歴史意識を取り上げる必要があるだろう。

3. 抵抗か屈従か

台湾人の日本の支配ないし日本化の政策に対する抵抗は複雑な様相を呈している。それには誰の目にも見える明らかな抵抗もあれば、面従腹背のような目に見えない個人の意識内における抵抗もある。従来「抗日運動」として取り上げられているのは、武力闘争による「前期」の運動と、議会設置運動などを中心とする「後期」の運動に分けられているが、いずれも明白な抵抗である。

1895年（明治28）年5月10日の日清戦争の公的終結の後、1915年に至るまで、二〇年間続く「泥沼の植民地戦争となった」⁽¹⁸⁾。まず「台湾

民主国」政権による日本軍占領阻止戦争（1895年5月～12月）、次いで台湾の「土着勢力」（土豪・下級士紳が農民をひきいる）による長期にわたる「執拗なゲリラ的武装闘争」（1895年12月～1902年）。さらに「支配確立後の……農民の間欠的反乱および反乱計画（1907年～1915年）」⁽¹⁹⁾。中でも「1898－1902の五年間に処刑された中国系の台湾人「土匪」（ゲリラ）は三万二千人に達し、当時の台湾の人口の1%を越えている。この植民地戦争での日本軍の損害は正規戦の日清戦争を上回るもの」であった⁽²⁰⁾。しかしこれは日本の支配に対して台湾人（土着勢力）が屈伏、隷従してしまっただけではなく、「妥協」したのだと吉田勝次はいう。

伝統的な土着社会は、外来の極反動の野牛によって圧伏され、内部に追い込まれた。だが両者の間にギリギリの妥協が成立した。土着社会は日本の植民地統治を《受け入れる》、だが総督府も土着の資本勢力と社会組織の存在を容認する。……土着社会はこの妥協によって、深い傷を癒し、これまでになく経験を消化し、ふたたび、しかも今度は別の形で前進できる時間をかせいだ⁽²¹⁾。

この妥協によって「台湾の土着の資本勢力（地主・商人）はしぶとく生き残ることができた。総督府も地主の土地所有権と土着商人の国際的ネットワークを認めざるを得なかった」。いっぽう総督府は土着の社会全体を上から押さえ込む嚴重な治安体制を作りあげたのである⁽²²⁾。

(17) 蔡茂豊『台湾における日本語教育の史的研究』、1989年、180頁。

(18) 大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」『岩波講座・近代日本と植民地・2・帝国統治の構造』、1992年、6頁。

(19) 若林正文『台湾抗日運動史研究』研文出版、1983年

初版、2001年増補版、7頁。

(20) 吉田勝次『台湾市民社会の挑戦』大阪経済法科大学出版部、1995年、4－5頁。

(21) 同8－9頁。

(22) 同7－8頁。

この「これまでにない経験」とは産業や社会構造の近代化、同化（日本化）教育・保健衛生の進展などであろう。いわば植民地的近代化の経験である。むろんそこには功罪両面がある。教育ないし文化統制はいっばうで台湾土着のアイデンティティへの攻撃となったが、識字率や進学率は大いに高まった。日本語による台湾全体の普遍的コミュニケーション・ネットワークが成立し、台湾ナショナリズムが醸成されていく。その状況の下で伝統的社会構造のリストラクチャーが進展し、その文化的基盤はゆっくり強化されていった⁽²³⁾。一方台湾人の意識もこの歴史的過程において徐々に変化していったのである。

以後台湾の抗日運動は議会設置運動などを中心とする表面上穏やかな「後期」の形態に移って行く。しかしやがて1930年代前半のうちに逼塞せしめられてしまったのである⁽²⁴⁾。それでは台湾人の抵抗はそれで完全に終息してしまったのか。そうではなくそれとは別に、日本によってもたらされた「近代化・文明化」の選択的受容によって、見えない抵抗を並行して続けていたのだとみられるのである。

4 台湾人アイデンティティの基盤： 莊堡と莊廟

林莊生は台湾知識人について次のように論じている。台湾が日本へ割譲される以前に生まれ育った世代は日本時代台湾のいわば「一世」だが、日本の領台後生まれた「二世」は当然時代が下がるほど日本の植民地教育や文化の影響を受けている。「二世」の中にも二派あって、漢文の教養があり漢詩を詠む派と、漢文の素養の

乏しい「日語族」とに分かれる。1910年ごろ以降に生まれた人では後者が多くなるという⁽²⁵⁾。

「二世」に属する台湾知識人の多くは日本近代文学を渉猟しており、日本語の翻訳を通じて西洋近代思想に接している。台湾人だけではない。大陸中国の郭沫若や魯迅なども邦訳によって西欧文学やマルクス主義の文献に接していたのである。こうした文化状況の結果、近代台湾社会の上層文化である哲学・歴史・文学・芸術などは、二十年も経たぬうちに急速に日本文化によって代替されてしまった。これは台湾が辺境の地で、保有されていた中国文化の根が浅かった上、伝統的な中国文化が近代化の挑戦には無力であったためであろう。

一方民間信仰を含む民俗・民芸・民謡など民衆の集団生活の知恵によって伝承されてきた社会の下層〔基層〕文化は、領台後も変わることなく根深く成長し続けたのである。

台湾の共同体的村落組織（莊堡）の中心には必ず莊廟が建設されている。台湾の民間社会の発展は実はその祭祀圏ないし信仰圏の発展と軌を一にしている⁽²⁶⁾。一口に言って廟を中心とした民間信仰は共同体的自治の中核であった。

土地生産に経済的基盤をおいた移住民は、中国大陆における郷土組織を通して、台湾にいわば共同体莊堡—村落組織を移植していたのである。そこには中国大陆の村落社会にある「土地に対する共同体意識」が存在し、「出入相友、守望相助」といった共同体的協調観念が保持されていた。また先住民の襲来に備えた自己保衛の組織を必要としたから、その面からも「移住民の集团的部落化と共同体的協調」が必要であった。

さらに重要なことはこの共同意識が宗教によっ

(23) 同9頁。

(24) 若林正文、前掲論文、8頁。

(25) 林莊生「楊千鶴女士與女也《無声的一代》」『台湾文学評論』第三卷第二期、真理大学台湾文学資料館、

2003年4月

(26) 林美容「由祭祀圏到信仰圏」『台湾史論文精選』上、玉山社、1996年、289頁。

でも基礎づけられていたことである。台湾での移住民は通常ひとつの荘堡と荘廟を建てており、これは「各府県村落至ル処ニ之ナキハナシ」といわれるほど普遍的に存在した。この荘廟は豊作を祈ったり、祭典を毎年定期的におこなうだけではなく、「冠婚・治病・処罰・宣告など日常生活や荘堡習慣の規則執行」も行われ、共同体意識が確認された。いわば「荘廟は荘堡の共同体的活動の機構」だったのである⁽²⁷⁾。

注目すべきことはその過程において、清朝が台湾統治に消極的だったこともこうした共同体的荘堡組織の自治性を高め、また官側による宗教に関する干渉もなかったことである。台湾の民間信仰は一個の独立した宗教的伝統であって、儒教・仏教・道教的要素を含まず、文字的伝統とも関わりがなく、封建帝国（清）や植民帝国（日本）に反抗するような「実用性」があったのである⁽²⁸⁾。

こうした事情は領台当時の日本側統治者にも知られていた。後藤新平は、台湾は「化外ノ民」として清国政府から放任されていたが、むしろそのゆえに、かえって自治は非常な発達を遂げている。……この「自治制ノ習慣」こそ、台湾における「一種ノ民法」である。それなのにこれまでの当局者は、軽率にもこうした自治の制度を破壊し、盛んに新たな法令を発して外観を整え、一見文明的な制度を一挙に導入しようとしてきた。これが失敗の根源である、と論じている⁽²⁹⁾。

周知のように日本統治期の末期、1937年から強力に推進された皇民化運動は、まさにこの台湾固有の下層文化を日本文化で置き換えようとしたものであった。L. チンによれば皇民化とは拍手を打つとか、「天皇陛下万歳」を叫ぶと

いった一連の身体的行為そのものである。同化は日本化の理想であるのに対し、皇民化は日本化の現実である。同化は曖昧であり、その社会の最終的な姿がよくわからぬのに対して、皇民化は明確で有無をいわさず、同化では目標であったものを力づくで達成するものであった。皇民化は土着の言語風俗の全般的な変成を必要としていた⁽³⁰⁾。したがってそれはもはや台湾人側の選択的受容を許すものではなく、宗教への干渉は不可避であった。

皇民化運動の柱は（1）台湾の固有信仰を日本の国家神道で置き換えること、（2）国語（日本語）常用運動、（3）改姓名運動、（4）志願兵制度の四つであったが、周婉窈はそのなかでも（1）の領域においてこそ皇民化に対する抵抗があったことを指摘している。日本が敗れたとき台湾人は、朝鮮でのように片端から神社に火をつけて焼き払う、というような激烈な反応は示さなかったが、神社神道は全くその痕跡を留めていない。かなりの「成果」をあげた日本語の普及や志願兵制度などの場合と異なり、皇民化運動は台湾人の伝統的な宗教への干渉においては全くの失敗だったのである⁽³¹⁾。

皇民化運動期の宗教への干渉は、台湾人の「自治の砦」である寺廟の整理という形で行われた。寺廟整信仰は当時「支那的」な要素をもっとも濃厚にもつ「陋習」として権力側から指弾されたのであるが、他の政策のように法令に基づいて一斉に行われたものではなかった。「宗教弾圧」のそしりを免れるためか、台湾総督府はむしろ慎重にやるようにと注意を促していたというが、背後で糸を引いていた可能性はある⁽³²⁾。しかし台湾民衆の抵抗力は根強く、日本降伏時までには寺廟整理を為し遂げることはで

(27) 涂照彦『日本帝国主義下の台湾』東京大学出版会、1975年初版、371-372頁。

(28) 林美容、前掲論文、314-315頁。

(29) 北岡伸一『後藤新平』中央公論社、1988年、39頁。

(30) Leo. T. S. Ching, *Becoming "Japanese"--Colonial*

Taiwan and the Politics of Identity Formation, 2001, p.93.

(31) 周婉窈「從比較的觀點看台湾與韓國的皇民化運動（1937~1945年）」『台湾史論文精選』下、玉山社、1996年、169頁。

きなかった。寺廟をはじめ台湾人がいかに伝統的な習俗を守っていたかは、日本降伏時に台湾人が狂喜して門聯を貼ったり、牌樓を建てたり、爆竹を鳴らしたり、獅子舞いをしたりなどさまざまな「国粹的総出籠（オンパレード）」を行ったことによっても知ることができよう⁽³³⁾。

もっともこのようなことは、皇民化運動のさなかに既にその予徴があったといえる。弘谷多喜夫は呉新榮という一台湾人が、生活改善運動には積極的に参加しながら、自分の子どもの病氣回復となると老大帝爺（寺廟）にすがる。自分は決して迷信家ではないが、歴史的価値がありすぐれた郷土美術でもある寺廟は永久に保存したいものだ、と語ったという⁽³⁴⁾。さらに重要なことは、こうした状況の中で民衆が意識して「二重人格的人物」を演じたことであろう。みんなの前では日本人としての言動をするが、家では台湾語と台湾の習俗の世界に戻るのである⁽³⁵⁾。「台湾の豊田正子」といわれた黄氏（池田）鳳姿は「皇民化運動によって表向きはともかく、人の心はますます古い殻に閉じこもってしまった。中華意識は根深く、頑固であった」と証言している⁽³⁶⁾。

当時の台湾の文学者もこうした状況を見逃さず描いている。坂口禰子の小説「鄭一家」（1941年）は習俗の側面から「内台一如融和」に疑問を呈した作品である。地域の名家鄭家の前当主であり、前街長であった鄭朝は皇民化運動に沿って、率先して日本的なものを受入れ同化しようとし、周囲にもこれを勧めていた。だが妻を始め周囲のものは国語常用を始めなかな

か彼に同調しようとしな。彼は亡くなる時自分の葬儀を万事「内地式」に行うよう遺言したが、「旧習慣」を守ろうとする親族はじめ周囲の抵抗は根強く、結局鄭朝の遺志を尊重しようとした息子も、最後は墓だけは内地式にすることを条件に、伝統的な華々しい葬儀をすることに同意するに至るのである⁽³⁷⁾。

また周金波「氣候と信仰と持病と」（1942年）では、主人公蔡大禮は、赤煉瓦の台湾家屋に日本間を持ち込んで神棚に大麻を祀るような人物で、「旧慣を改」めようとする社会運動家であり、忌み日も家族の懇願にもかかわらず簡素な「新式」でやるといって聴かない。ところが息子の急病に逢って突然気の狂ったように土俗的な信仰に逆もどりしてしまい、大仰な礼拝を日本風に改造した家の中で行う経緯が描かれている⁽³⁸⁾。

これらの事例から、台湾人の生活の基層である習俗や信仰が、いかに強力で持続的な抵抗力をもっていたかを改めて痛感させる。これに比べれば、日本語の普及を中心とした「日本化」は、現象的には一見大きな変化のように見えたとしても、それは台湾人の社会的文化的伝統や深層心理にまで及ぶものではなかったといえよう。

5. 大衆の「歴史意識」

小論の冒頭で日本が台湾で行った歴史教育の定着に疑問を呈しておいたが、実は歴史にも上層文化としての（換言すれば表向き／建て前の）

ㄨ (32) 竹中亮造「寺廟整理の性格」『天理台湾研究会年報』第四号、1995年。

(33) 林莊生、前掲論文、60-61頁。

(34) 弘谷多喜夫「日本統治下台湾の戦争動員（皇民化運動）期を生きた世代と教育の意義」『「大東亜戦争期」における日本植民地・占領地教育の総合的研究』（平成10・11・12）年度科学研究費補助金研究成果報告書、代表研究者槻木瑞生）2001年。

(35) 殷允芃編、丸山勝訳『台湾の歴史——日台交流の三

百年』、藤原書店、1996年、379-380頁。

(36) 池田鳳姿「池田と台湾と私」1982年、48頁。游珮芸『台湾における日本植民地時代の児童文化の研究』（お茶の水女子大学大学院1996年度前期学位論文）より再引用。

(37) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集 第五巻』緑陰書房、1998年、9-59頁。

(38) 『周金波日本語作品集』緑陰書房、1998年、14-37頁。

歴史と、下層文化としての（本音の）歴史というものがあるのではないか。何義麟は大衆の歴史意識をめぐる興味深い観察をしている。彼によれば、大衆が歴史に関心がなかったのではなく、民衆の中には教科書などとはおよそ無縁な歴史意識や歴史像が確固として存在していて、公定の歴史がそこに割り込むことが困難であったのではなからうか、と⁽³⁹⁾。

何義麟は辜顕榮と廖添丁という近代台湾史上における対照的な人物を大衆がどう評価しているかを通して庶民の歴史意識の実態を見極めようとしている。辜顕榮（1866-1937）は一般大衆からは「御用紳士」視されている人物である。辜はもと小商人で、1895年日本軍の台北入城に際し、侠客肌の彼は城内の混乱を恐れた同地の有力紳商に派遣されて日本軍陣地を訪れ、日本軍南下の先導をつとめて日本側の信用を得た。後に後藤新平に知られ、「対台湾人対策の顧問役」として抗日ゲリラの招降や、食塩専売の実施などに活躍し、その島内販売の総元締めなどの利権を獲得し、それらを足がかりに台湾五大族系資本の一つとされる富豪になりあがったのである⁽⁴⁰⁾。

1920年代に入ると、台湾の知識人と土着資産階層は総督府と妥協して、武力によらない抵抗運動へと転換する。それが台湾議會設置運動や、台湾文化協会による文化啓蒙運動であったが、辜顕榮は統治者側に立ち、文化協会の指導する民族運動に対抗してこの年「公益会」を組織して台湾人による政治社会運動の批判を行った⁽⁴¹⁾。

辜はその政治論である「台湾思想」の中で、日本の統治を受けて我が台湾島民は世界中で一番幸福になったという。大陸では革命によって清が中華民国になったが、建国以来騒動が絶え

ない。名は共和政治だが実態は軍閥が割拠している。台湾では匪族が一掃されて以来というものの全島と氣藹藹、天下泰平で兵役の義務もない。清時代に比べ経済的にも大いに潤っている。忠臣二君にまみえずと、私のことを台湾を売って個人的富貴栄達を図るものだと非難するものがあるが、私は清朝に反逆したのではない。清朝の皇帝が台湾を日本に割譲した以上私は正々堂々たる日本帝国の臣民だ。それならば日本帝国に忠義をつくし、併せて台湾三百六十万の同胞の福利を謀るのは当然のことだ、というのである。彼はこのように「現実主義的」な政治路線をとり、「むしろ太平の走狗たるとも、乱世の民とならず」（寧做太平狗、不做亂世民）という名文句を吐いている。辜顕榮は思想的には関公を尊崇していたという。忠臣義士を志したわけだが、その対象が台湾の割譲によって清朝から日本帝国に変わってしまったわけである⁽⁴²⁾。

何義麟は「日本植民体制下において、辜顕榮のようにいち早く帰順した台湾人が統治への協力という役割を担うのは、植民地支配の構造的な問題であるとともに特定の社会階層の問題であって、辜顕榮自身の問題ではない」と考えるのだが、多くの台湾人は彼を植民地協力者のイメージでとらえているため、「御用紳士」の代名詞になっているという⁽⁴³⁾。

それに対して台湾総督府の档案に残されている資料から見限り「ならず者」としか思えない廖添丁という人物は、民衆から「義賊」として慕われ、最後には「抗日英雄」としての伝説まで生まれている。それは廖が警察や台湾一の金持ち林本源家を襲ったためである。「廖が襲った相手が、警察や『御用紳士』であったことが、当時抑圧されていた台湾人に、大きな想像をかきたてたからである」と何義麟はいう。このあ

(39) 何義麟「台湾人の歴史意識」『アジア遊学』No.48、2003年2月。

(40) 若林正文、前掲書348-349頁。

(41) 何義麟、前掲論文。

(42) 林荘生、前掲論文、59頁。

(43) 何義麟、前掲論文。

たりは日本の鼠小僧次郎吉や佐倉惣五郎などが義賊や英雄に祭り上げられる経緯とよく似ているように思われる。その実態が何であれ、表向きあらわにできない金力や権力に対する反抗心を満足させてくれるものがそこに見出せたからであろう。

何は「たとえ総督府の協力者となるという大きな代償を払ったものだとしても、辜顕榮が植民地支配下の近代化の動向をいち早く察知して、それに便乗しようとする側面があったことが重要だと考える。……他方廖添丁は、たとえその《義賊》的な性格がある程度事実だったとしても、近代化という問題とはおよそ無縁である」という。そして、なるほど歴史研究者からすれば、こういう観点からの評価も重要だと思われるが、それによっては庶民感覚における人物評価を覆すことはほとんど不可能であり、台湾総督府や光復後の国民党政府が教えようとしたこととは全く異なる歴史像が民衆の中には確固として流れているのだと何は指摘している⁽⁴⁴⁾。台湾人の歴史意識における近代化と伝統との相克とも言えるであろう。半世紀前の「光復」時に「日本化」をめぐる階層分化が起きていたといわれるが、今日の歴史意識においても同様な現象があるのかもしれない。

6. 「日本化」は「奴隷化」でなく「文明化」である

——台湾人のアイデンティティの根源——

日本の敗北後台湾は国民党によって接收されたが、この日本語を解さぬ新しい台湾の支配者の目には、台湾における日本文化は無価値であるのみならず、長い統治によって台湾を毒した奴隷の文化に見えた。そして台湾人は日本文化によって奴隷化されているが故に、これを払拭

して、新たに中華文化を注入しなければならないと考えた。解放者として中心の中国から辺境の台湾へやって来た中国人は、ほとんどが自文化こそが規範文化たりうると考えていた。彼らは台湾人が植民地時代に受容した日本の文化や思想を「奴隷化思想」と呼び、日本による教育を「奴隷化教育」として「一掃」されなければならないとした。そこでマスメディアの規制や検閲制度によって「日本文化思想の遺毒」を一掃し、さらに、宣伝文書を編集して中華民国意識を台湾に注入しようと企図したのである⁽⁴⁵⁾。

これは戦後日本を占領したアメリカが「軍国主義・超国家主義」によって汚染されてきた日本からその害毒を一掃し、「民主主義」を注入しなければならないと考えたのと構造的に似ていなくもない。戦後日本は「白人の重荷」という「植民地的うぬぼれ」が横溢していたアメリカに占領されたわけだが⁽⁴⁶⁾、これに対して台湾は「日本の奴隷化」から回復させようという「中華的うぬぼれ」(?)をもった国民党によって占領されたわけである。もちろん戦後日本と戦後台湾とを単純に比較するのは間違いだが、両者とも占領者によって一種の思想的「浄化」が行われた点では状況が類似していたといえよう。

だがそれに対する住民の反応はきわめて対照的だった。それはJ. ダワーが指摘しているように、アメリカ占領軍は植民地的権力性を帯びているのに、当時の日本人はほとんどそのようには受け止めず、日本共産党でさえ占領軍を「解放軍」として歓迎していたのに対し、台湾では国民党による占領は「新たな植民地化」と受け止められており、そのことは1947年の「二二八事件」の発生によって端的に示されている。

まず日本を占領したアメリカのほうがはるかに「紳士的」であった。台湾人は喜び迎えた国

(44)何義麟、前掲論文。

(45)黄英哲、前掲書21頁及び40頁。

(46)John W. Dower, *Embracing Defeat, Japan in the Wake of World War II*, Norton, 1999, p.23.

府軍兵士が、まるで「敗残兵」のようでモラルも低かったことに失望して「犬去って豚来た」と言ったという。堂々として誇りある米軍を迎えた戦後日本とはきわめて対照的だったのである。さらに対照的なことは、台湾社会と中国社会との間の落差である。台湾人は中国大陸よりも台湾のほうが優位にあると感じていたことである。これは精神的にも物質的にもアメリカに圧倒されていた敗戦直後の日本とは根本的な違いである。台湾人は「台湾を接収することは、日本を接収することである。低級な社会組織によって、高度な社会組織を接収することは、当然、容易ではないことだ」といったという⁽⁴⁷⁾。いっぽう当時の日本はアメリカに対して日本の劣弱さをいつも痛感させられていた。その日本に統治されていたが故に台湾人が国府に対して自信を持つとは、歴史の皮肉としか言いようがない。

それなのに日本の統治によって奴隷化しているといわれるのは、台湾人には到底認め難いことであった。これに対して当然さまざまな反論が展開された。黄英哲によれば『民報』は「本省人は、日本人の奴隷化教育をついぞ受け入れたことがない」と主張した。「経済的な搾取は受けたけれど、断じて奴隷的な生活をおくっていたのではない」というのである。王白淵は「台湾同胞は五〇年の奴隷化政策を受けたけれども、台湾同胞は決して奴隷化していない。……現象と本質の相違は、はっきりと認識すべきである」。また吳濁流も、日本の教育は科学教育の面ではある程度成功したが、精神教育の面では奴隷化教育は成功しなかったといったという⁽⁴⁸⁾。

このような主張は、光復時に台湾人が言語の面を中心に「かなり日本化されていた」という

事実とどのようにかわるであろうか。結論を先に言えば、台湾人は日本統治下で経済の面では支配されたが、文化的思想的な自律性を失うことはなかったというのである。台湾人のこの自負はどこから来るのであろうか。

植民地帝国日本は、欧米帝国主義諸国のキリスト教のように自民族を越えて妥当する普遍的な教化手段を欠いていた。日本は自らの近代化において欧米の科学技術を中心に近代文明を摂取する一方、その精神的背景を成すキリスト教の受容は拒み続けてきた（「切支丹禁制」は消極的に解除した）。日本自ら受容した近代文明を台湾人も受容しようとしたが、偏狭な民族宗教である国家神道/天皇制/皇国史観は、表面的には従っていたように見えながら、ついに台湾人の受容するところとならなかった。それは伝統的な宗教（寺廟）への干渉が激しい反発を招いたことにもよく現れている。台湾人のアイデンティティの根底は護持されたのである。

さらに台湾社会は抗日運動や商工業の発展を通じて、近代的民主主義の訓練や高度な資本主義の実体験を積むことになった。また日本語による文芸活動やマスコミュニケーションの成立は台湾人としての共同体意識を形成する基盤ともなった。つまり「日本化」は押しつけられたのではなく、台湾人が主体的・選択的に受け入れていたということである。ツルミが「天皇崇拜よりも便所へ行ったら手を洗うという習慣のほうが受け入れられた」というのはその古典的な表現であろう⁽⁴⁹⁾。

陳培豊はこのような「日本化＝日本語体制」の教育の受容を、より積極的に「抵抗としての受容」だと規定している。

「文明への同化」と「民族への同化」がな

(47)黄英哲、前掲書 186頁

(48)同 176-178頁

(49)E. Patricia Tsurumi, *Japanese Colonial Educa-*

tion in Taiwan, 1895-1945, Harvard University Press, 1977, p.215.

いまぜになった「同化」教育を、台湾人は全否定したのではなく、フィルターをかけて受け入れてきたのである。……少なくとも昭和初期までは、近代文明に焦点化し国体に関連する「徳育」には無関心だった台湾人の態度に大きな変化は見られなかった⁽⁵⁰⁾。

もっとも「皇民化運動」の下では「フィルター」の濾過機能が次第に衰退させられていくことになった。「時間の経過に伴って日本人的な要素を全く遮断することは困難であったろう」という⁽⁵¹⁾。

これに対してL. チンは同化と皇民化とは質的に異なるものとしている。同化は台湾人を日本人（的）「にしよう」とするのだが、皇民化は台湾人を日本人「として扱う」のである。日本人として振る舞う以外のことは公的には許されない。したがって「近代文明」は受け入れるが「国体に関する」ことがらは拒否するというような選択の余地はない。

「日本語を常用する」「神棚に拍手を打つ」「天皇陛下万歳を唱える」「日本式の姓を名乗る」といったことは誰の目にも明らかな身体的行為であり、それによって不断に「日本人である」ことを証明しなければならないのが皇民化なのである⁽⁵²⁾。そのゆえに、先に指摘したように、見えないところでは内に（中華的な世界に）閉じこもる傾向を強化したのだが、結果的に「フィルター」の機能は低下させられたであろう。

そういう犠牲は払ったにしても、台湾人はしたたかにあらゆる機会をとらえて自己のアイデンティティ形成に利用したのである。この意味で「日本化」には台湾人にとっては明暗両面があった、というよりもこの「明」の視点からす

れば、日本文化の全面否定は、当時の台湾人にとって自己喪失にもなりかねないことだったのである。台湾人は植民地支配の差別待遇と搾取には反感をもったが、他方、植民地支配下という制限つきではあったにせよ、そこで達成された「近代文明」に接することができ、日本の教育を通じて世界の国々の文化にふれることができた。台湾人が「奴隷化」という言葉に強く反発したのは、「奴隷化」を「日本化」に置き換えることの是非を超えて、日本語を媒体として世界文化を接収するという、いわば文化受容の「世界化」という視点からこの問題をとらえていたからにはほかならない⁽⁵³⁾。だがそう胸を張れる根拠には、他方では台湾人のアイデンティティの保持がなければならない。それは内なる中華的な伝統の保持が文化の核心にあったということであり、それは明文化された思想だけでなく、荘廟を中心とした大衆的な習俗にもその根を持っていたといえるのである。

これはまさに植民地的近代論であるが、台湾人は日本の支配を受けて、普遍的で世界的なレベルで思考することができるようになった。それは単純にそうなったのではなく、粘り強い内面的な闘争の末にそうなったのだ。そういう内面的な闘いを経て初めて台湾人は主体性を保持できたのだということである。そうでなければ「奴隷化」されてしまうほかなかったであろう。

おそらくもっとも決定的な点は、一見逆説的だが、日本語の普及を媒介として台湾に近代的なナショナリズムが生まれたということであろう。「台湾島民は全島規模の言語的同化を通じて日本人化されたが、それと同時に全島共通の《国語》は諸方言と血縁・地縁で構成されていた各種の小型共同体意識を越えた、台湾大（サイズ）の共同体意識を形成したのである。それ

(50) 陳培豊『「同化」の同床異夢——日本統治下台湾の国語教育史再考』、2001、298頁。

(51) 同書279—282頁。

(52) L. Ching, op.ct., p126. et al.

(53) 黄英哲、前掲書 182頁

は台湾ナショナリズムの萌芽であったといえよう」⁽⁵⁴⁾。それはまさに台湾が日本化によってその魂を奪われたわけではないことをもっとも如実に示すものであった。これは日本の植民地化の意図をはるかに超えたものだといえよう。確かに日本統治下で搾取も受け、差別もされたが、それは結果として台湾の近代化のためのインフラストラクチャー整備の過程になったということである。そこでもたらされた社会変動こそが、植民地化のいわば「明」の面だったのである。もちろんこれを「明」としてとらえられるということは日本側の意図や恩恵ではなく、台湾人の洞察力であり、主体性であることは言うまでもない。

ここで思い出されるのは佐藤春夫の創作「殖民地の旅（二）」である。佐藤の訪台は1920（大正9）年のことであるが、この作品の中で林献堂をモデルとしていると思われる台湾人が、日本と台湾との関係を同化か平等かと論じた後、佐藤にこう言っている。

……本島人は既に自ら文明人なりとの自負を持ってゐる。さうして忌憚なく申せば台湾に来てゐる一般の〔日本人の〕役人や商人などの文明よりも高い文明を持ってゐると自負してゐる。その彼らが自分の高い自負を捨ててより低い文明に同化することは

人間の本性として肯ぜぬところであります……内地人の本島における政治的地位の優越はこれを十分に尊重して居るのであります、政治的地位の優越必ずしも文明の優秀を意味するやを問題とする者であります⁽⁵⁵⁾。

これはまさに光復後接收に來た国民党に対する台湾人の態度を思わせる。ただここでは中華文明を日本文明より優位にあるとしたのだが、光復時においては中国大陸文明よりは台湾のほうが日本文明を通じて優位になっているという論理である。台湾は既に日本が領有する以前に産業や社会組織の面で大陸より優位にあったとされているが、当時の台湾人のアイデンティティはほとんど中華そのものだったといえよう。しかし戦後の台湾人のアイデンティティは中華だけに還元されえない、日本を媒介として形成されたものを確固たる基盤としているのである。日本化は「奴隷化」ではないどころか、「文明化」であり、少なくとも台湾人はそのように受け止めたのであって、思想的文化的には中華を失わっていなかった。台湾人が中華に出て中華を越える媒体とされたのである。この論理が台湾人の歴史意識の根底にあって、それが台湾の現代史のダイナミズムを形成しているのではなからうか。

(54) 藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998年、7頁。

(55) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』別巻、143-144頁。なおこの作品の発表が1932年10月と佐藤春夫

の訪台より12年も後になっているのは、仮名を使用しているものの、実在の人物をモデルにしたためと言われる（藤井省三、前掲書、84-86頁）。

